

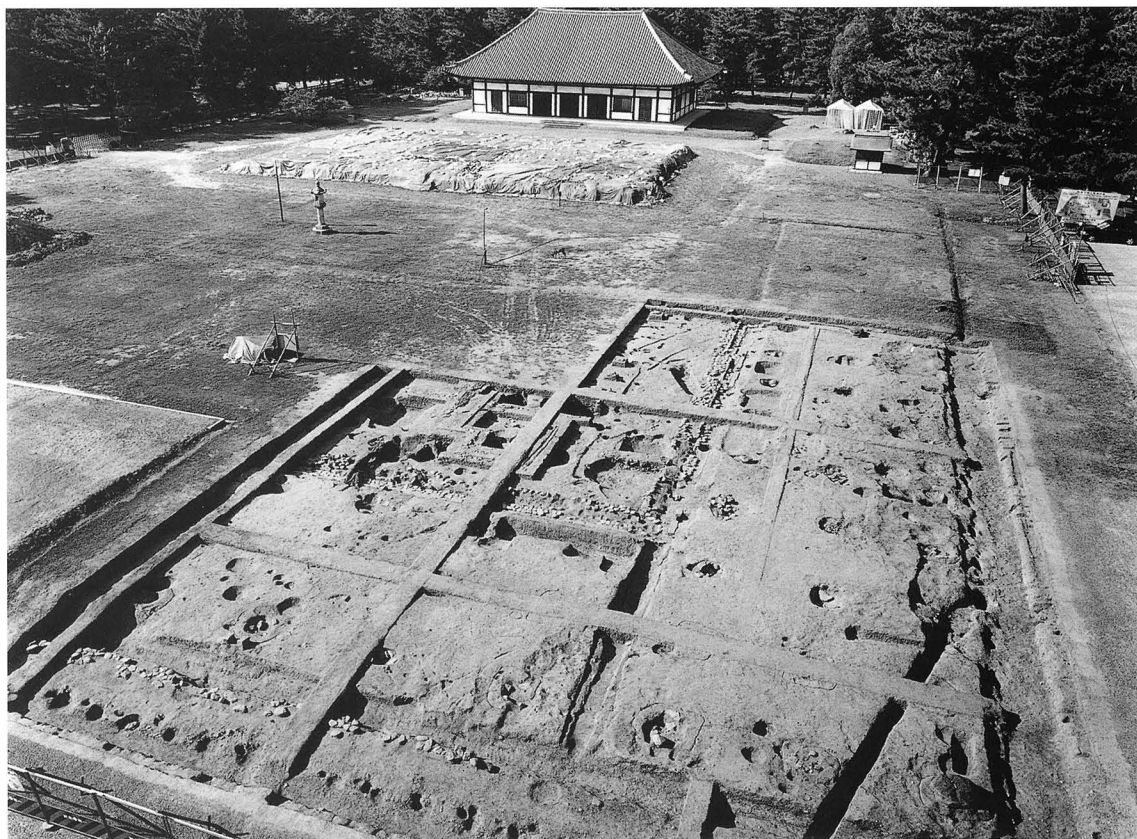
3 遺 構

本調査では中金堂院回廊東南部とその内側にある内庭の東南部分を発掘した。調査区北半と西半は境内整備のための盛土があり、現地表面から遺構面までは比較的深い。南半では調査前から遺構面が露出していた部分もある。

1998年度の中門、1999年度の回廊東北部の調査では、中金堂院の東北から中門東半へとつづく谷筋を確認した。この谷筋の東側の肩は、本調査区の東北隅から中央をとおり調査区の南へ抜けている。今回検出した中金堂院内庭部と南面回廊は谷筋にあたり、谷の西側の肩はみられなかった。断割調査の結果、寺地の造成に際して、谷を周辺の土で一定程度埋め立てた後、埋め立てとは別の土で突き固めながら整地を行っていることが明らかになった。調査区西辺では内庭部の遺構面から約1.6mで谷底（旧地表）に達する。

（1）回廊基壇上の遺構

基壇全体は削平されており、松の植樹による近世以降の攪乱もあり、残存状況は良好ではない。回廊基壇部分の築成は、谷を暗茶灰色の砂質土で厚さ80cm前後埋め立てた後、地山由来の礫混じり橙黄色砂質土を突き固めて水平に整地する。基壇部分は整地土に似た土を整地面より20cmほど積み上げて築成し、その上に粒度の細かい黄灰色土を版築して仕上げている。基壇下の整地土は厚さ約40cm、黄灰色の築成土は現存で15cmほどである。谷筋東側の東面回廊基壇は、礫を含む橙黄色白斑砂質土の地山を削り出し、上面に地山由来の土を積み上げ突き固めて築成している。この積み上げ築成土は厚さ10cmほど残存し、地山を直接掘り込んでいる礎石据付掘形の上面を覆っている。



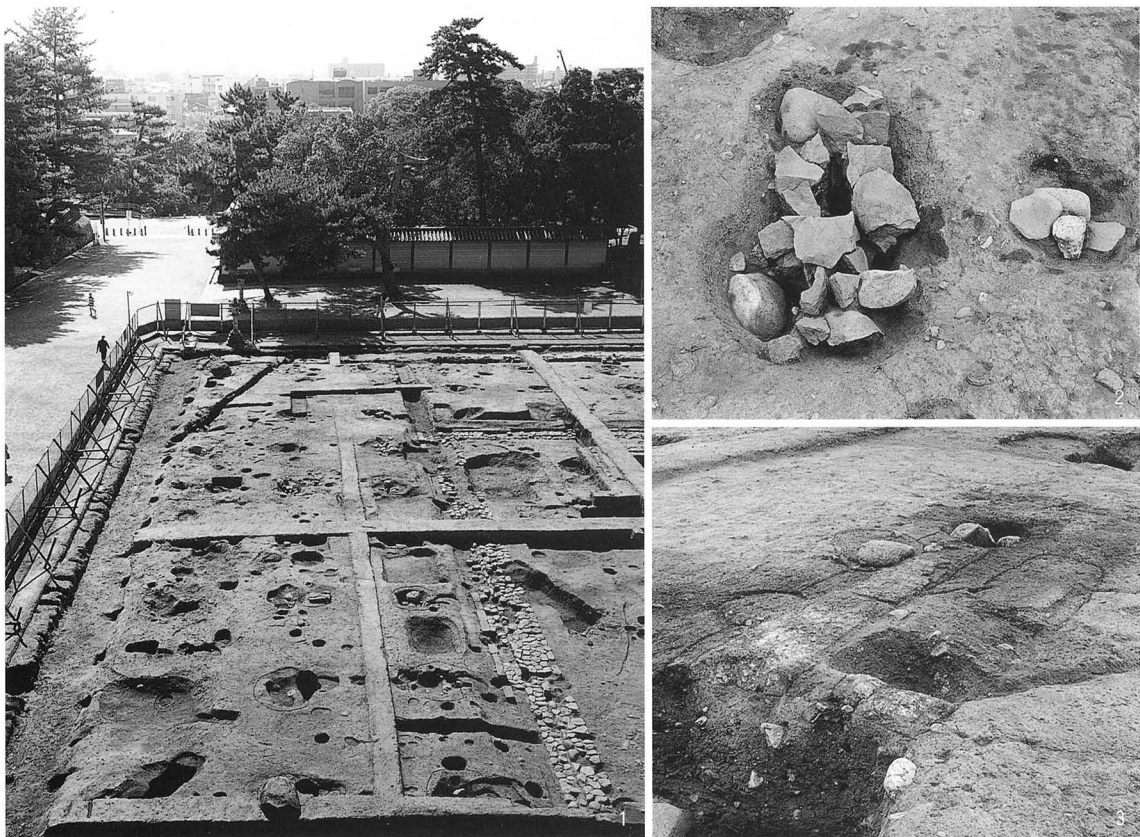
第4図 調査区全景（東南から）

東面回廊SC7500 梁行2間、南面回廊と交わる東南隅部を含めた桁行8間分を検出した。調査区北では現地表下約25cm、調査区南では5cmほどで基壇上面に達する。遺構面の標高は94.9～95.3mで北が高く南に向って低くなる。基壇外装地覆石上面との比高差は、最も残りのよいところで約25cm、礎石上面との比高差は40～45cmあり、基壇上面はかなり削られている。

本調査区内の礎石は2基のみ残存する。いずれも三笠安山岩で、径0.9～1.2mの不整形の自然石を使用している。棟通り柱筋北端の礎石には、抜取穴と非常によく似た暗灰色砂質土を埋土とする掘り込みがあり、抜き取りあるいは据え替えを意図した痕跡が認められるが、礎石の位置は据付当初と変わらないとみてよいだろう。東側柱筋東南隅の礎石は原位置を保つ。そのほかの柱位置は礎石抜取穴として確認した。抜取穴の一部には長さ30～50cmの河原石の根石が据えられた状態で残存し、礎石の破砕片が投げ込まれていた例もある（第5図2）。検出された礎石据付掘形は、長径1.5～1.8m、短径1.3～1.5mの不整形が多いが、隅丸正方形に近い整った形のものもある。断面の観察から、掘形底部に一定程度、土を入れ版築した後、根石を据えていることがわかる。

SX7501は棟通り柱筋に凝灰岩の切石を2列に並べた地覆石列である（第5図3）。幅約20cmの切石は15cmほど間隔をあけて配列され、各石列は別々の掘形を掘削して据えられている。これは東面回廊北半で検出した地覆石列と一連のもので、回廊中央を通る間仕切りの地覆と地長押を受ける施設であろう。

南面回廊SC7416 桁行4間分を検出した。現地表から10～15cmで基壇に達し、基壇上面の標高は94.9～95.2m、南側は削平され北ほど残りがよい。回廊北辺の基壇外装地覆石上面との比高差は最大で約30cmある。礎石は残存せず、柱位置は抜取穴と据付掘形によって確認した。北側柱筋では据付掘形を覆う基壇積み土が薄く残存している。SC7416の棟通り柱筋にある浅い掘り込みは、凝灰岩片を多く含



第5図 東面回廊基壇と基壇上の遺構

1 基壇全景（北から） 2 礎石抜取穴（南から） 3 棟通り地覆石列SX7501（東南から）

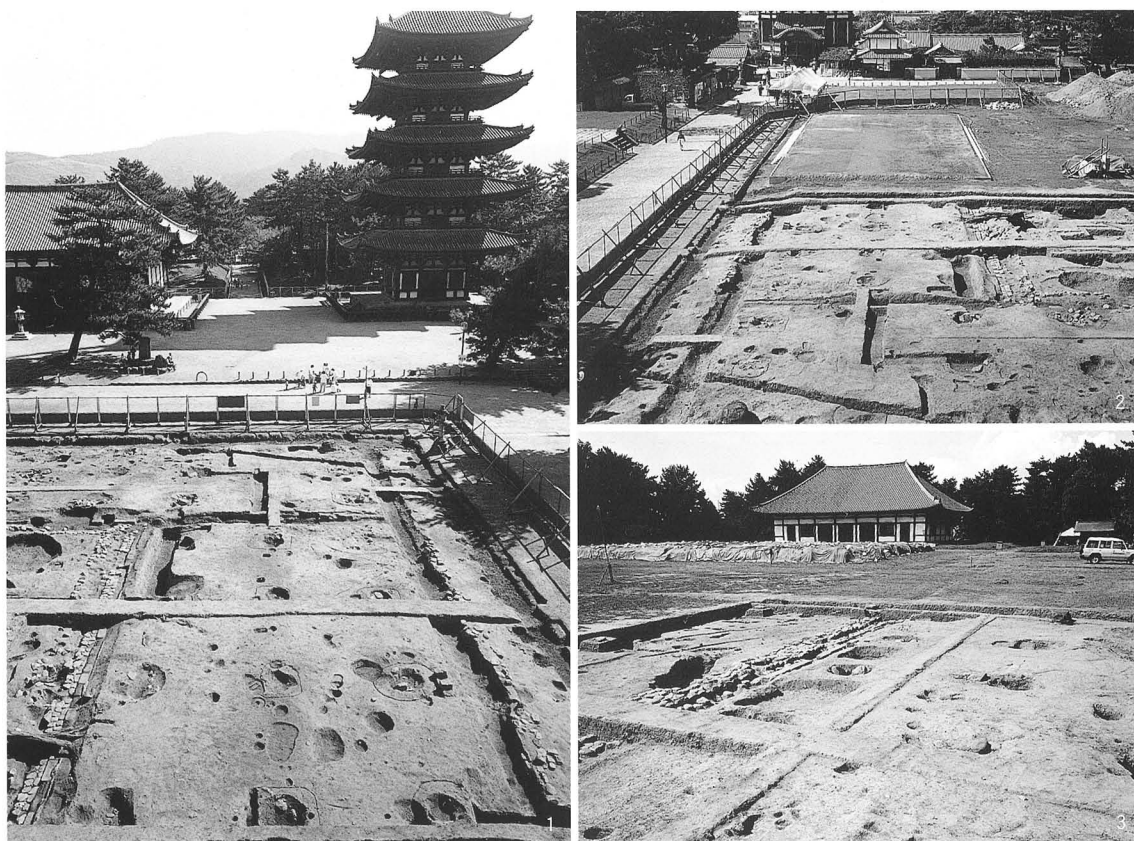
むことから、1998年度に南面回廊中門取り付け部で確認した棟通り地覆石SX7423の抜き取り痕跡であろう。回廊基壇幅は東面、南面回廊ともに約10.8m、基壇の出はそれぞれ約1.9mに復元できる。

掘立柱建物SB8365 東面回廊の中央部、回廊基壇上に位置する南北棟の建物である。北東隅、南東隅の2柱を欠く桁行5間、梁行2間で、本調査区では建物南半の桁行3間分を検出し、その北半は1999年度調査区に及ぶ。桁行柱間寸法は約4m、梁行は約3.6mある。柱穴の径は約80cm、検出面から約80cmほどの柱穴底部には自然石の礎盤石を据えている。柱穴はいずれも回廊の礎石据付掘形、礎石抜取穴の西辺に位置し、礎石据付掘形を掘り込み、礎石抜取穴によって切られていることから、この掘立柱建物の柱は礎石の西に沿う形で建てられていたと考えられる。

柱列SA8366～SA8369 SA8366は東面回廊東側柱筋の西側に位置し、南北に並ぶ約3m等間の柱列。SA8366の西側約7mに位置するSA8367も約3m等間の南北柱列である。両者は柱間寸法が等しく、柱位置も東西に対応するので関連する遺構かもしれない。SA8368はSA8366、SA8367の北側に位置し、東面回廊の棟通り柱筋上に約2m間隔で南北に並ぶ柱列である。この西側に並列する形でSA8369がある。両者とも柱列の北端は1999年度調査区に及び、掘立柱建物SB8365の柱穴を切り込んでいる。

土坑SK8371～SK8373 東面回廊の西側柱筋上で基壇を掘り込む土坑を検出した（第6図3）。SK8371～SK8373は不定形で、長さ2～3m、幅2mほどある。いずれも近世の土器、近世後半に属する瓦が含まれている。土坑は礎石据付掘形を避けて掘り込まれていることから、掘削当時、礎石は存在していたと考えられる。

上述の掘立柱建物、柱列、土坑は、位置や出土遺物の年代などから、回廊の建物が存在する時期のものとは考えにくく、中金堂院最後の火災である享保2年（1717）以降につくられたものと推定する。



第6図 南面回廊基壇と東面回廊基壇上の遺構

1 南面回廊基壇（西から） 2 南面回廊基壇（東から） 3 東面回廊基壇上の土坑（東南から）

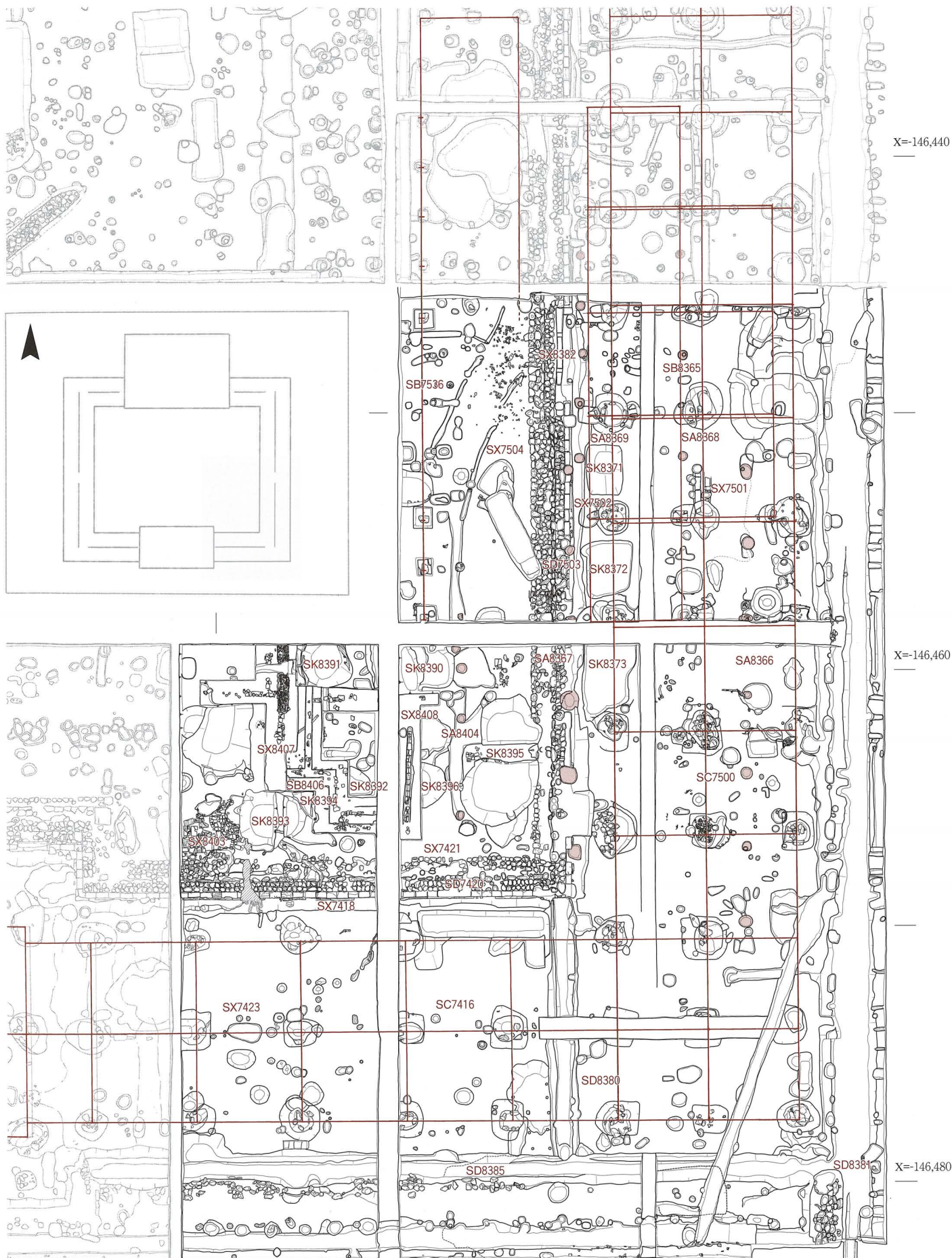
Y=-15,190

Y=-15,170

X=-146,440

X=-146,460

X=-146,480



第7図 発掘調査遺構平面図 (1:200)

(2) 基壇縁と外周の遺構

東面回廊の東側は現代の排水溝によって破壊されており、石材はすべて抜き取られていた。南面回廊南側は、埋土に近世以降の軒瓦片や陶磁器片を含む溝SD8385によって壊されている。溝の南岸には雨落溝あるいは石敷の材と思われる河原石が遺棄されていた。近世の遺物を含む東面回廊西側の溝SD8383、南面回廊北側の溝SD8384の下で基壇外装、雨落溝、石敷を検出した。

基壇外装SX7502・SX7418 SX7502は東面回廊基壇の西縁基壇外装で、北半の残りがよく、南半はほとんど抜き取られている。南面回廊北縁のSX7418の残存状況は良好である。いずれも凝灰岩の切石を用いた基壇外装で、地覆石と羽目石の一部が残存している。地覆石は幅20～25cm、長さ37～50cmの切石で、上面は平坦に仕上げているが、羽目石を組み合わせる仕口や束石をはめるほぞ穴はない。凝灰岩には硬軟の差が認められ、風化の度合いも一様ではない。羽目石はすべて軟質の凝灰岩で、下端部に切り欠きを施して地覆石の背面に落とし込んでおり、その下端部のみが残存している。葛石は確認していないが、外装全体は束石のない壇上積基壇であろう。SX7502地覆石上面の標高は、94.95～95.06mと南に向かってゆるやかに傾斜し、SX7418は94.83～94.90mで西に傾斜する。

雨落溝SD7503・SD7420 基壇外装地覆石の内庭側に沿って構築された石組みの雨落溝。東面回廊西側のSD7503と南面回廊北側のSD7420の規模と構造は同様で、径20cm前後の河原石を2列に敷き並べ、幅約40cmの溝底を形成する。溝の内庭側には河原石を立てて側石とし、基壇側は基壇外装の地覆石を溝の側壁とする。SD7503底石上面の標高は94.85～95.00m、SD7420は94.78～94.88mで、基壇外装の地覆石と同様に、北から南、東から西へ向かってゆるやかに傾斜している。地覆石上面と雨落溝の底石上面との比高差は5～8cm、側石上端との差は8～15cmある。



第8図 東面回廊西側の基壇外装と外周遺構

1 基壇外装と外周遺構の全景（北から） 2 基壇西側の石敷SX7504（西南から）

石敷SX7504・SX7421 東面回廊西側のSX7504は、基壇外装と同様に北半ほど残りがよく、南面回廊北側のSX7421は、東半の残りが比較的良好である。SX7504は内庭側の面をそろえて見切りとし、溝側は雨落溝の側石を基準にして径20～40cmの河原石を4列に敷き並べ、溝側にわずかに傾斜させる。雨落溝の側石を含む幅は約90cmある。後述する廃棄土坑SK8395の東側では凝灰岩を敷いているところもあり、部分的な補修と考えられる。SX7421は内庭側の見切石1列の残りはよいが、そのほかの敷石は側石とともに抜き取られている。雨落溝SD7420との関係を見ると、SX7504と同様の規模と構造とを有していたと考えるが、SX7504に比べ石が小ぶりで石と石の間に隙間が目立つ。雨落溝の側石や敷石の抜取穴から中世の遺物が出土している。

暗渠SD8380 雨落溝SD7503の延長線上に位置し、南面回廊基壇を南北に貫通し、基壇南側溝に連結する。同位置で数度の溝の掘り直しが観察され、溝埋土からは中世から近世の土器片、陶器片や瓦片が出土する。蓋石や側石、底石は残っていないが、溝埋土最下層には凝灰岩の細粒や碎片が含まれており、元来は凝灰岩切石を組み合わせた暗渠であったことがわかる。暗渠北端には凝灰岩の切石片が残存し、切石上面の標高は雨落溝SD7503の底石と一致することから、雨落溝に合わせて据えられた暗渠への入水口であろう。

溝SD8381 回廊東南隅から南へのびる石組みの溝（第9図3）。東面回廊東側の現代溝の下層で検出した。遺構の掘形北端は南面回廊南側の溝SD8385の南辺に位置し、南端は調査区外へつづく。幅約1.3mの掘形中央に径20cm前後の上面平坦な石を2列に敷き並べて底石とする。西辺には溝側の側面を垂直に加工した石を据えて側石とする。溝東側の側石はすべて失われているが、抜取穴が確認された。側石に挟まれた溝の幅は約40cm、底石上面の標高は94.37mあり、側石上面は底石より15cmほど高い。



第9図 南面回廊北側の基壇外装と外周遺構

1 基壇外装と雨落溝（東北から） 2 基壇外装と外周遺構（東から） 3 溝SD8381（東南から）

階段SX8382 本調査区の北端近くで検出した、東面回廊SC7500西辺の階段である。段石や階段の築成土は残存していないが、調査区北端にある基壇外装SX7502の地覆石の西側に接する形で凝灰岩の切石が据えられており、雨落溝SD7503はこの切石を迂回して西側に張り出している（第11図）。雨落溝SD7503の東辺には長条形の抜き取り痕跡を検出した。基壇外装西側の切石は階段北側の羽目石をのせる地覆石で、雨落溝東辺の抜き取り痕跡は階段前面の地覆石にあたるとみられる。

階段北側の羽目石をのせる地覆石は長32cm、幅30cmあり、地覆石の長さから階段の出は約30cmとわかる。階段南側の羽目石をのせる地覆石は残存していないが、雨落溝SD7503が屈曲する位置を階段の南側と考え、その位置に北側と同様の地覆石を想定した場合、階段地覆石の外面間は約4.5mに復元できる。階段の位置と幅は、階段の東側に位置する東面回廊の桁行柱間1間分に相当することから、階段に対応する門の位置を明らかにすることができる。

回廊基壇高の復元を試みる。調査区の北端に残る礎石上面の標高95.64mと、基壇外装SX7502の北端に位置する地覆石上面の標高95.05mとの比高差は0.59mある。礎石上面が基壇上面よりも2寸ほど高かったと仮定し、さらに基壇端までの水垂れ勾配を1寸ほどと見積もると、葛石上面の標高は95.55mとなる（1寸=3cmで計算）。以上から基壇高は約0.5m（1尺7寸）と推定される。この基壇高であれば段石1段で基壇上面に登ることが可能であろう。段石は地覆石に直接のせるものとし、1尺角程度と想定すると、階段の出とも整合する。葛石の厚さは7寸ほどとなる。仮に階段前面を通る雨落溝の上に渡りのための板石があり、その厚さを3寸とすれば、段石の蹴上げの高さは7寸となり、葛石の蹴上げとも一致する。階段両側の羽目石や耳石も含めた復元案を第21図に示した（22ページ）。

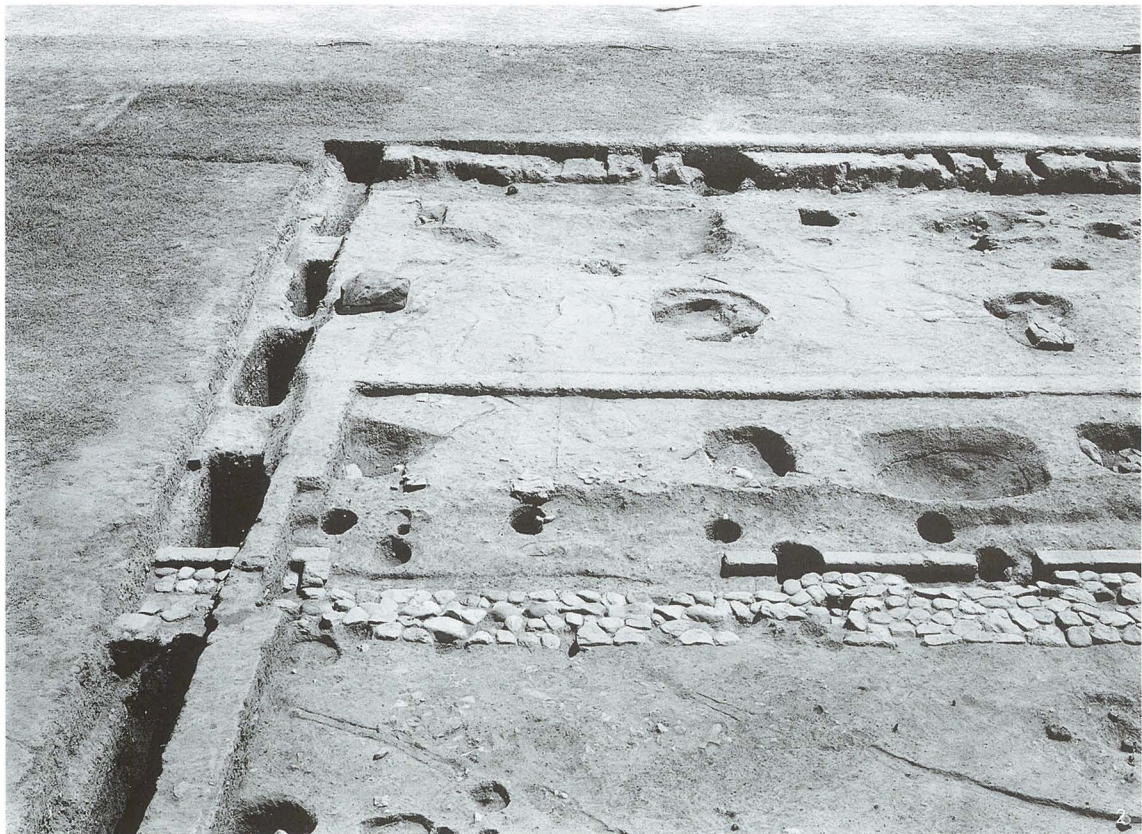
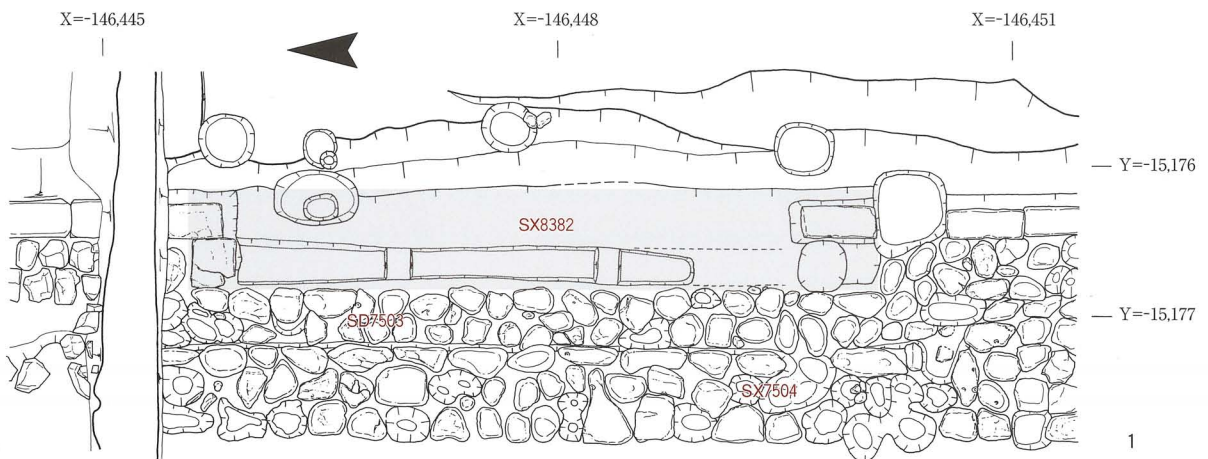
東面回廊西辺の基壇外装SX7502は、階段の幅に対応する範囲の地覆石が抜き取られている。階段北



第10図 階段（東北から）

の地覆石や、その東に接する基壇外装の地覆石は、抜き取り痕跡を切る形で据えられている。このことから、階段は基壇外装の地覆石を抜き取った後に構築したことになる。これについては基壇外装の地覆石をいったん通した後に、階段構築のために地覆石を抜き取るという一連の工程の中での状況とみるか、階段のない時期があり、後に階段を新たに構築するという時期差とみるか、現状ではどちらとも決し難い。中門北側や中金堂においても、凝灰岩の切石で構築された階段が検出されているが、いずれも雨落溝や石敷とともに明確な改修の跡が認められた。本調査で検出した階段の時期については、既往の調査成果を考慮したうえで検討する必要がある。

回廊の階段としては興福寺食堂の西側に取り付く軒廊の事例がある。軒廊の北側に位置し、幅は約12尺あり、凝灰岩製の延石、地覆石と段石が1段残存している。周辺の雨落溝や石敷などは検出されていない（奈良国立文化財研究所『興福寺食堂発掘調査報告』、1959年）。



第11図 階段

1 階段遺構平面図（1：50） 2 階段（西から）

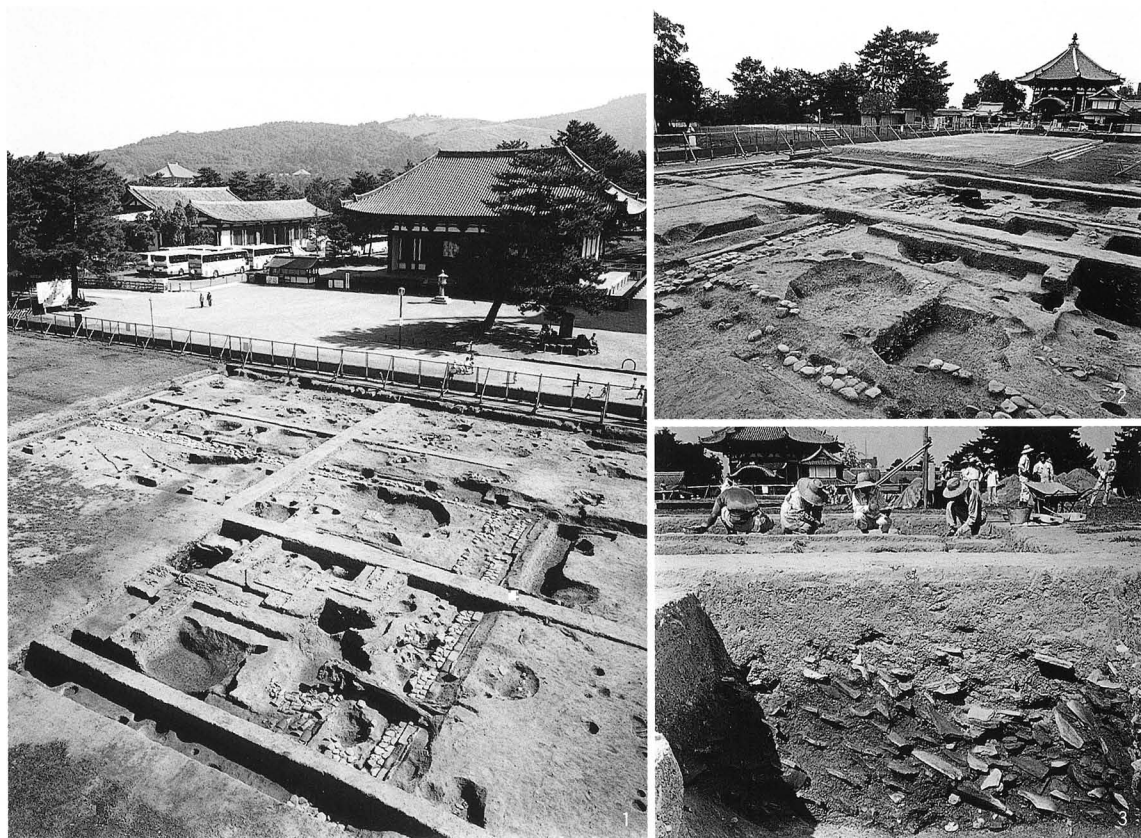
(3) 内庭部の遺構

回廊に囲まれた中金堂院内庭部に相当する。表土を取り除くと近世以降の建物遺構が検出された。近世の瓦片、土器片を含む茶灰色砂質土の包含層を30cmほど下げると、近世以前の遺構が検出される遺構面に達する。内庭面にはごく薄い白色砂の層がひろがり、瓦片が埋め込まれた部分が一部にみられる。多くの溝や小穴を検出したほか、大型の廃棄土坑が南面回廊北側に集中している。

廃棄土坑SK8390～SK8396 土坑の形状は不定で、規模も径2～5mと一定ではない。SK8390～SK8396は大量の瓦とともに赤褐色の焼土が含まれており、火災時に生じた廃棄物処理した土坑であろう。SK8390～SK8393からは奈良～平安時代の軒瓦が出土し、SK8395からは奈良時代から中世の軒瓦が出土している。完掘しているわけではないため推測の域を出ないが、これらの土坑には時期差があると想定できる。中世以降のSK8395は石敷SX7504を壊し、埋土に石敷の敷石と思われる石が含まれている。

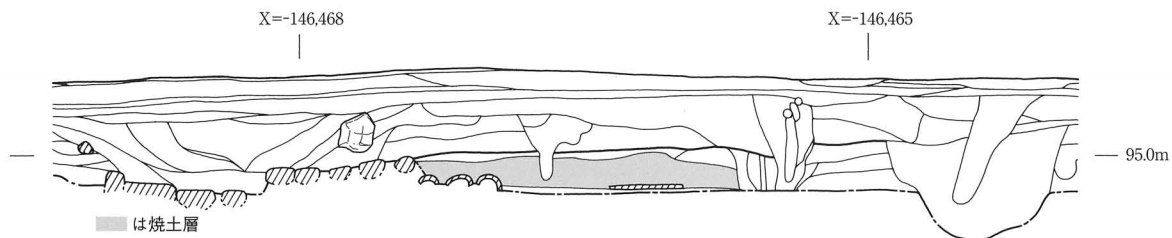
瓦敷地業SX8403 本調査区西辺の断割調査で、内庭部の白色砂層を取り除くと赤褐色の焼土層が検出され、この層に覆われるように大量の瓦が出土した。焼土層は20cmほどの厚みがあり、瓦はその下半から出土する。丸瓦、平瓦が多く、軒丸瓦、軒平瓦も含まれている。瓦は黄色マンガン斑の内庭部整地土の上に置かれ、向きは不揃いだが西半に平瓦がまとなり、東半では丸瓦が上下に重なる(第14図1)。土圧により破碎しているが完形に復元できるものが多い。古代の丸瓦、平瓦がほとんどで、軒瓦はすべて奈良時代である。

瓦の出土状況からすると、回廊屋根からの崩落や単なる遺棄とは考えにくい。焼土層は石敷SX7421北辺から1.8mほど北の瓦が出土する範囲に限られ、南はSX7421の下にもぐり込んでいる。焼土層上面の標高は内庭の遺構面と一致することから、火災後この部分を削り込み、瓦を敷き焼土をかぶせた



第12図 内庭部の遺構

1 内庭部全景(西南から) 2 内庭部東南隅(東北から) 3 廃棄土坑SK8390の瓦堆積状況(東から)



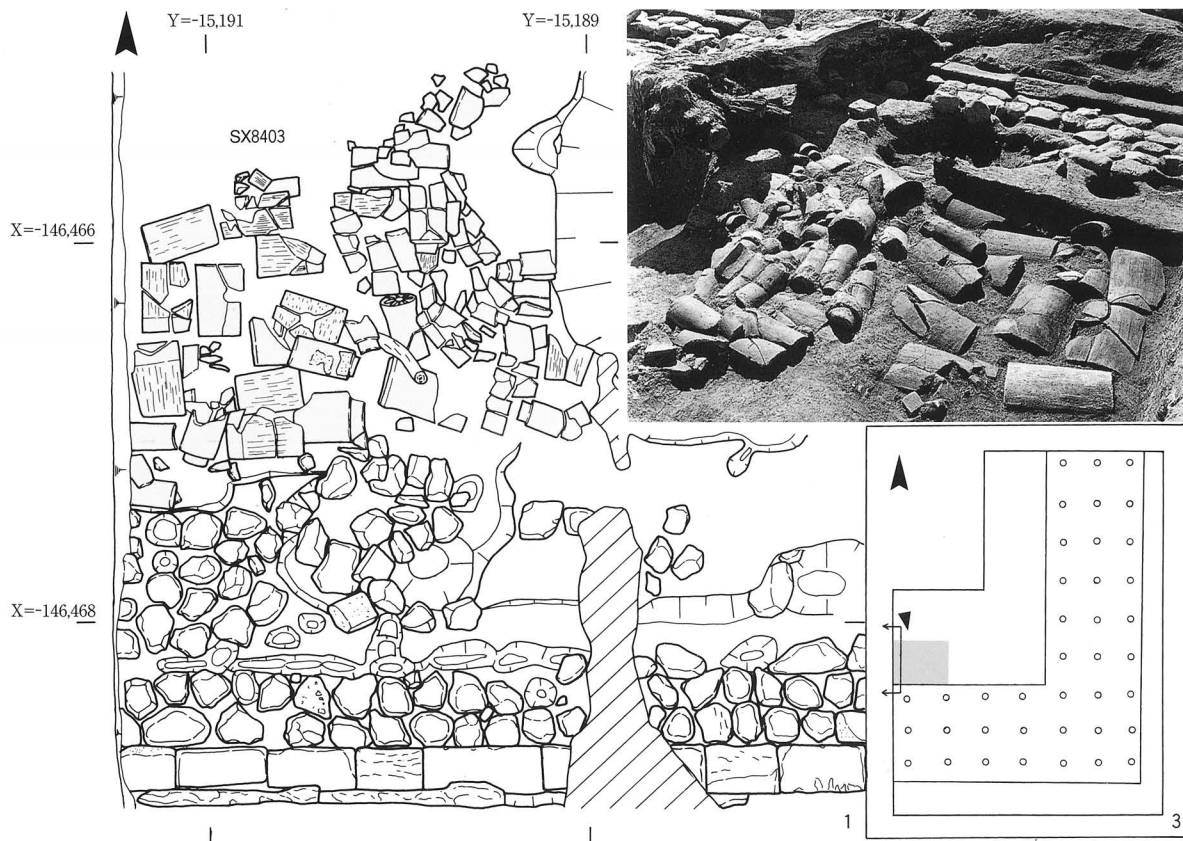
第13図 調査区西壁断面図 部分 (1:40)

後に石敷SX7421を敷設したことがわかる (第13図)。

柱列SA8404 廃棄土坑SK8395の西側に南北に並ぶ柱列。柱筋や柱間は一定ではないが、径40cm前後の柱穴内には完形の丸瓦が縦に据えられ、自然石の礎盤を据えている。恒常的な建物の柱穴とは考えにくく、法会時に幢などを立てた穴の可能性がある。

仮設建物SB7536 廃棄土坑群の北にある南北棟の礎石建物で桁行6間分を検出した。1999年度の調査で確認した礎石建物の南半部にあたり、既調査分と合わせて桁行12間、梁行2間の建物となる。礎石は一辺30~40cmの方形で上面を平らに加工した切石で、礎石の心心間の距離は1.95mある。近世後半の瓦を含む包含層上にあり、1999年度調査で示された明治時代以降という年代観とも矛盾しない。

建物SB8406 内庭南半部に位置し、長さ20cm前後の不定形の石を地面に敷き並べる。この東には東に伸びる丸瓦列があり、建物の基礎と思われる。雨落SX8407はSB8406の西側にあり、南北に伸びる幅約50cmの施設で、破碎した平瓦を木端立てして長条形につくる。南側と西側には瓦片を平置きした施設が取り付く。建物SB8406にともなう雨落と考える。丸瓦列SX8408は建物SB8406の東側に南北に伸びる施設。瓦幅よりわずかに広い幅の浅い掘り込みをして据えている。区画施設と思われる。



第14図 瓦敷地業の瓦出土状況

1 出土状況平面図 (1:40) 2 出土状況 (北西から) 3 平面図と断面図の位置